

# 戦後教員文化の一断面——東京・足立一中の教師たち

田 沼 朗

はじめに

本稿では、戦後の教員文化を探る一環として、東京・足立一中の教師たちを取り上げる。標記の時期の教育実践に関しては、すでに林友三郎『おとなは敵だった』<sup>1</sup>が刊行されており、また私たち自身がその教員文化的検討をおこなったものもすでに存在する。<sup>2</sup>ただし、紙数の制限もあって、学校づくりを全体として把握する点においては、若干の不十分さも存在する。特に、当時おかれていた足立一中の立場を配慮して、林の著作は教育政策や管理職に関しては禁欲的記述となっている。そこで、本稿ではこれらの点についても視野にいれ、改めて関係者にインタビューを行い、<sup>3</sup>かつ当時の学校の資料を参照しながら、一九五〇—六〇年代の足立一中の教師群像と教育実践を立体的に浮かび上がらせたいと思うのである。

ところで、先ほど学校づくりに視点を当てると述べたが、もう少し敷衍しよう。この学校は、非行問題の取り組みで一躍名を馳せたのだが、彼等の子どもの実情把握、その社会的、文化的背景把握、

教員文化の自己反省・革新、目指すべき学校像について検討したい。

## 一 前史……開校から一九六〇年までの足立一中

1 府立五中のリベラルな校風による学校づくり……岡校長時代  
足立一中は、一九四七年五月二日に開校された。初代校長となった岡泰彦氏は、旧制府立五中（現在の東京都立小石川高校の前身）で二六年間国語・漢文の教師であった。校地の選定、教職員集め、教育条件の整備など、一からの出発であった。林友三郎氏の証言によれば、岡校長は、戦前の師範教育には疑問を持っていたようで、「古い師範教育では駄目だ、視野の広い教師を取ろう」といつていたという。<sup>4</sup>そこで、府立五中関係者（教員・卒業生）を中心に教員を集めることとした。福田正雄（校務主任）、宇都宮康則、長田和男、加藤武之助、<sup>5</sup>などである。林友三郎氏も府立五中の出身でかつ岡先生の教え子でもあった。

林氏によれば、府立五中では、戦前・戦中であっても、配属将校以外は体罰を振るわなかったという。自治という言葉も使われてい

て、大正デモクラシーのリベラルな伝統が残っていた。「岡校長は、足立一中を府立五中のリベラルな精神で創ろうとしたのではな

いかと」、述べていた。例えば、どんな議題でも、先輩、後輩に関係なくオープンに議論する雰囲気があり、特に府立五中出身者は口喧嘩ばかりしていると言われた。<sup>6</sup>また学校の徽章も府立五中の徽章に少し手を加えて作ったものだった。<sup>7</sup>さらに校歌は、岡校長作詞作曲で、その三番は「つくるべし 文化の国 ひらくべし 平和のその 自由の鐘 ひびきわたり 平等の旗 ひらめく……」と、文化・平和・自由・平等の理想がちりばめられていた。

さて、この時期は教育条件という点では不備な点が多々あったが、教師たちは熱心に教育実践に取り組んだ。一九五〇年第一期生の卒業を前にして、アチーブメントテストが実施され、その結果一中が足立区内でトップとなった。また、当時の名門都立高校へも合格者を多数出すこととなった。こうして、一中の名声が地域にも伝わり、「さすが一中」と評価されるようになる。第五期生から越境入学者が増加し始める。近隣学区の小学校の成績トップクラスの子どもが越境入学してくるようになった。<sup>8</sup>聞き取りによると、当時の足立区は千住界限を除いて農家が多く、一中へ子どもをいれることが一つのステータスシンボルであったといわれている。<sup>9</sup>この越境の問題に関しては後に検討したい。

## 2 低迷と抵抗期（一九五二年四月から一九六〇年）

(1) 第二代校長赴任による学校の雰囲気の変化（一九五二年四月から五六年）

一中の自由な雰囲気は、五二年四月に第二代校長が赴任したことにより、大きく変化した。林は、東京都教職員組合の教師たちが被告となった勤務評定裁判の証言において次ぎのように述べていた。「まず、職員会議は校長の諮問機関だと言われだします。上から校務主任が任命されてきて、校長への連絡報告、そういうものが非常に細かくなります。第一に子どもの授業と生活指導、第二に校内事務、第三に役所への報告といった順序が逆になります。……校長と同じバスにのって登校した先生が遅刻となりますが、校長は遅刻ではありません。どうしてかと尋ねると校長の職は教員とちがうのだこのことです。学年主任、学部の主任も任命制になります。<sup>10</sup>こうして、学校の運営や教師個人への統制が厳しくなっていく様子が伺える。この背景には、教育政策の転換、とりわけ教育二法律に見られる教員統制強化があるが、さらに校長のパーソナリティーの問題も大きかったという。例えば、教師への姿勢が非常に権力的で傲慢、教師の自信を失わせるような言動をしばしば行ったという。個別に呼んで「おまえなんか何もできないんだ」、といったり、新卒の長浜氏には「学芸大学なんか大学と違っていいない。君のお母さんに子どもが世話になったから取ってやったんだ」と言ったりした。<sup>11</sup>かかる対応をしながら教師集団を切り崩していった。ある時には飲ませる、またある時は出世を餌に釣る、私生活上の尻尾を掴まえる

などして校長派を形成していったのである。<sup>(12)</sup> もちろん抵抗もあったが、以後徐々に組合脱会者が増えていった。

(2) 第三代校長期……勤評闘争、非行問題への取り組みを契機に  
学校民主化

五六年四月に、第三代目の校長が赴任した。当初は、第二代校長の路線を継承した。五八年の勤務評定反対一〇割り休暇闘争（四月二三日）直前には組合脱会者が一〇名を越えるに至る。休暇闘争の日に校長は生徒に向かつて、「一中分会はヤクザ以下である」と暴言を吐いたりした。その後も公安調査庁の職員に一中教職員の写真を渡し、組合員には丸印をつけるなどの行為をした。こうした中で、自分たちは何のために勤評反対闘争をおこなっているのかを自問し、子どもの教育のためではないかという思いを強くしていった。組合脱会者もあつたが、四月二三日闘争を契機に意気が上がるようになっていったという。

二学期になって、非行問題に取り組む中で教職員集団の質も変化し、相互の信頼関係も強固になる。学校運営の民主化に取組み、この過程でPTA会計に関する校長の不正が発覚し、校長は教職員集団から信頼を失い、六〇年三月に転出する。<sup>(13)</sup>

(3) 第四代校長……一中非常時（一九六〇年四月から一月）

四代目校長も第二代校長以来の管理路線を継承しようとしたが、教職員に相手にされず、一学期末に都教委に進退伺いを出す。その理由は、一中は①組合管理である、②会計不明朗である、③特設道

徳をやっていない、の三点であるが、反論されて一月末に異例の転出をする。その跡を継いで、一月一日に第五代校長（初代校務主任）が着任したことで、管理職と教職員の関係の波風がようやく収まって来たのであつた。<sup>(14)</sup>

二 非行問題への取り組み

1 地域の様子

『おとなは敵だつた』は、一九五八年から六一年にかけての実践記録である。まず当時の一中の状況と学区域について検討しよう。

一九五八年度学校要覧によれば、二五学級、全校生徒一二〇〇人、教職員数五七名（うち教員四一名）にのぼる大規模校である。

当時の足立区は、東京二三区の中で最も生活水準が低いといわれていた。一中は、都心に隣接した足立で最も繁華な千住に位置していた。父母の職業は事務的職業、「工的作業」が多い。実際には零細経営者、小資本で経営される工場・商店で働く者が多かつたという。夫の稼ぎだけでは生計を支えることが不可能で、妻も夜半まで内職をすることも多かつた。一中の生徒のかなりの部分がこのような家庭環境下にあつた。<sup>(15)</sup>

ただし、「やっちゃば」（東京都の野菜卸売市場）に店を出している人は、日銭も入り相対的に安定していた。当時の千住郊外は、まだ農村の面影を色濃く残していたが、先に若干ふれたように、戦後復興期に入り安定しつつあつた階層にとっては、一中へ子どもを入

れることが一つのステータス・シンボルであったという。また、千住界限では、金を持っていることを示すために私立中学へ子どもを入学させることがしばしばあったといわれている（女子の例が多かった）<sup>(16)</sup>。

## 2 おとなは敵だった

非行生徒は、一中の場合五〇年代中頃からしばしば目立つようになつたようであるが、教職員集団として非行問題に取り組み始めたのは、五八年度からであった。当時の非行の様子を簡単に紹介しよう。「拳で破目板を割つてみたり、竹刀でドアを破つたりするかと思つと、だれもない教室で、だれにもいつけられたわけではないのに修繕したり、かと思つと、授業中に南京豆を食べたり叫び声をあげたりする。」(11三〇頁)。これは千吉の例であるが、この他にも学校内外でのけんか、暴力行為、たかり、ゆすり、などである。

では、それまでの教師（大人）と非行生徒との関係はどうかといえ、かれらにとつて「おとなは敵だった」のである。教師とかれらとの間に教育的な指導関係が成り立っていなかったのである。その点について次ぎのように述べていた。「とにかくかれらにとつて、おとなは敵だった。敵のいうことなんぞ、おかしくて聴いていられないもんか。おとなだとか教師だとかいうことをかさききて、無理に聴かせようとするのなら、こつちが弱いうちはがまんして、だ

まつてあたまの一つもさげていれればいいんだ。」(11二八頁)。「おまえら、先生とゆつくり話したことねえのか（長浜）？。ねえよ。おいら、まともなことや勉強のことで先生と話したことねえよ。いつも叱られてばかりだ。」(11四〇頁)。

林たちは、問題児と教師との関係は、最悪の人間関係で、警察と犯罪者のような人間関係の中で指導が行われていたと述べていた

(11四〇—四一頁)。それどころか、こうした教師—生徒関係は、問題児に特有というよりも、一般生徒にも当てはまる普遍性があったのである。後に詳しく検討するように、非行問題に取り組む中で、一中の教師たちは、生徒との接し方、指導方法、その根底にある権威主義、非行生徒に対する教師個別の対応を反省していくのである。彼等は親からの人間らしい愛情をかけられてこなかったことを取り組みの中で教師は知るのである。さらにその中で、自分たちに内在する教員の体質（我々の言うところの教員文化）を深く反省し、克服の努力をしていくのであった。長浜氏は、一中の職場文集「伸びゆく生命」に以下のような教師としての悔恨を書いている。

「一般的に、教師は特に子供達に対しては自己の誤りを認める率直さに欠けている。しかるに、子供達に誤りを指摘し、その矯正について、言葉だけの追求について言えば、鋭さと執念深さを持つている。このことを子供達は小学校以来体験させられているのである。」(11四五頁)。

長浜氏にこの悔恨を書いた動機を尋ねたところ、次ぎのように述

べていた。「両親が共に教員で、家に入出入りする教員達の言動を見ていて、感じたことである。また、戦時中福島県に疎開したが、その旧制中学でファッショ的な教師に指導されたときの思いがあった。それから、勤務評定反対闘争の時に、校長派について組合を離脱していった教員たちにそういう印象の者が多かった」<sup>(1)</sup>。足立一中の教師たちは、悔恨に見られる古い教員文化を単なる外在的批判とするのではなく、自らの問題としても深く反省していくのである。

### (3) 釣り上げ、追いこみ

まず非行生徒への取り組みは、学級からも教師からもこぼれたまま泳ぎ回っていた「問題児」たちを一人一人掬い上げて指導することからはじめた。これを「釣り上げ」と呼んでいた。これは、一九五八年の二学期から始まった。意識的に取り組んだと言うより、自然発生的に長浜氏が始めたものである。この年度長浜氏は、一学年に所属していたが、産休に入った教師に代わり二年生の授業も担当することになった。ここでの問題児とは、二年生の政吉、千吉、一郎、康夫、昇、武三たちであった。非行問題に取り組んだのは、長浜の他に、林（二年の学年主任）、根本、仁科（いずれも三年の学級担任）たちであり、これらの生徒の直接の担任ではなかった。前述したように、学年・学級をこえて何をやってもよい自由な雰囲気  
が学校に残っていたのであった。

先ず彼等の中で長浜の目に留まったのは康夫であった。徐々に人

間関係もできていく中で、一〇月から康夫と二人で居残り勉強を始めることになった。長浜の「おまえ、勉強やるきあんのか？やる気があるんなら手伝つてやるが、どうだい？」という呼びかけに対して彼は次ぎのように答えた。「うん、教えて……。サボつたら、ぶんなぐつてもいい。そのかわりよ、先生、できなくつてもよ、捨てないで。」<sup>(1)</sup>（五五頁）。こうして、二人だけの居残り勉強が始まったのだが、他の連中も「先生、おれも……」と行って、辛づる式に釣り上がってきたのであった。そして、先にあげた教師たちも加わって、これらの生徒たちに協力して勉強を教えるようになっていったのである。

### 三 ぶつかった困難

#### 1 家庭的貧困（経済的・文化的貧困）……子どもの問題行動の二類型(1)

さて、居残り勉強を続けることで教師と彼等の信頼関係も徐々になってきた。教師集団として非行生徒たちの立ち直りを目指して、彼等の低学力、発達のゆがみ、生活のくずれの根源に迫っていったのであるが、その中で幾つかの困難に直面したのである。その一つは、家庭の経済的・文化的貧困、家庭崩壊であった。

例えば、千吉の場合はこうであった。実父は戦死。その後彼には三人の父と呼ばれる男ができた。母親が次々と連れて来たのであった。母親は、その男たちには尽くしたが、子どもたち（千吉・姉・

妹)を人間らしく育てることを怠った。父親はいずれも病死、それも前夜まで元気だったものが、朝になったら死んでいたという奇妙な死にかたであった。こうした生活の中で、先ず姉が家出し、千吉もぐれた。癩に触ると人を殴り、金に困ると学校のストーブでも何でも持ち出して叩き売った(1)二八―三五頁参照)。

昇の場合はこうであった。小学校四年のときに弟が病気で入院した。母親が毎日看護に通院するうちに、同じ病院に入院している子どもの父親と仲良くなり、妾に囲われて、家を飛び出して行った。その後、弟が死に、心臓を患う病弱な父親と昇との寒々とした生活が続ぎ、昇もぐれていった(1)三五―三六頁参照)。

政吉の父親は守衛だが、給料が少なく、帰宅後内職をし、母親も夕方から飲み屋へ勤めに出る。それでも五、六人の子どもを十分食べさせることはできなかった。政吉はサンマの開きを丸ごと一枚食べることがなかった。家は一間しかなく父親がゴム糊を使って靴の内職をするので、座敷は糊と塵とで真つ黒である。政吉の寝室は戸棚の中である(1)五八―六一頁参照)。

康夫も父親を戦争で失っていた。雑役婦として雇われている母親の稼ぎだけでは育ち盛りの康夫と姉を養育することは困難であった。康夫は彼等の中では勉強はできる方であったが経済的に厳しいものがあつた(1)五六―五八頁参照)。

こうした家庭の経済的文化的貧困の中で、彼等は自己実現する機会を持ってないでいた。家では食うこで精一杯で勉強どころではな

い。学校では低学力で授業が分からない。将来への展望も暗い。こうした非行生徒たちを見て、長浜は「死んでもとつこなんだよ。だからやつらなんでもやるさ。」といった(1)三九頁)。「死んでもとつこ」でよいはずがない。教師たちは、彼等に生きる見通しと生活展望を与えることを教育実践の基本に据えていくのであつた。

## 2 地域の愚連隊、やくざとの関係

もう一つ実践の過程で直面した困難は、非行生徒が地域の愚連隊・やくざと繋がりを持つていたことであつた。一中の非行生徒の後ろには地域の愚連隊である小野、福原、横沢兄弟、杉倉兄弟等が控えていた。そしてその後ろには〇〇一家などが控えているのであつた。当然ながら生徒たちを立ちなおす為には、地域の愚連隊、やくざ組織からきりはなす必要があつた。そこで、勤務時間後の夜間の家庭訪問、愚連隊のアニーたちとの直談判、〇〇一家から取り戻した生徒たちを奪い返されないようにと、自宅に引き取って抱いて寝たこともあつた。<sup>(18)</sup>こうした林達の実践は、「二四時間教師」、「篤農家教師」と賛否両論を含んで呼ばれた。

またこうした実践のなかで、教師が個別に対応するだけでは不十分であることが明確になり、教師が集団として方針を持って対処する必要が自覚されていった。

## 3 子ども観をめぐる対立・葛藤

第三番目の困難は、学校内部の問題であった。すなわち、教師の間での子ども観（非行生徒の見方）の対立・葛藤であった。林・長浜氏によれば、当時の一中では教師間に非行生徒に対して三つの立場が存在していたという。その一つは、非行生徒は邪魔だという立場の教師たちである。例えばある教師は、「あんな奴等、相手にするのいやだ」、「機関銃で一斉射撃だ」といった言葉を吐いていた。こうした立場は、組合脱会者と重なっていた。他方の立場は、非行生徒は犠牲者である、早く教師との人間的な関係を回復しなければならぬ、と主張する教師たちである。林や長浜がこの立場であった。この二つの中間に、どちらかといえば林・長浜の主張に同調しつつも非行生徒とうまく関係を作れなくて悩み迷う層があった。<sup>(19)</sup>

前述したように、五八年の勤評問題をめぐって、学校内では、校長・組合脱会者と組合間の対立が存在していた。これに子ども観の相違が絡んで、事情をいっそう複雑にしていた。また、非行問題の取り組みは、青年教師であった長浜が自然発生的に開始したこともあって、組合員どうしの間でも確固たる合意を得ていたわけではなかった。だから職員会議で、非行生徒の担任（女性教師）が、校長や側近から攻撃を受ける。分会会議でも、長浜や林の指導に、「非行生徒を飼っているのか」<sup>(21)</sup>「わずか数人の生徒だけに手をかけて他の生徒をどうするんだ」<sup>(22)</sup>（(1)―(2)頁）といった批判が出されるのであった。

結局、教師間において、非行生徒の実情、その背景、彼等の把握の仕方、指導法とその体制について、激しい相互批判を含んだ議論を展開する中で、林・長浜が非行生徒に行っている指導に担任と教科担当が協力することが合意された。林は、この議論の中で感じた古い教員の体質について以下のように述べていた。

「おとなといえば職員室の同僚しか知らず、いつも目下の子どもたちを相手に生きている教師という人種には、弁解の余地もないほどに追いつめられるという経験が少ないから、口では民主主義を唱え、平和を叫んでも、一段高い教壇の上からお説教を授ける先生根性が抜けがたく残っているのだ。子どもと話し合うなどといったも、人間対人間の関係でよりも、結論が先に決まっていた、『わたしのほうは絶対間違っていない。』という条件つきである。このような、権力をかさにした説得などは、相手を屈服させることはできても、信服させることはできない」（(1)―(2)頁）。

#### 四 学校づくりの前進と子どもたちの新たな問題

1 学校づくりの前進……子どもの権利を保障する学校をめざして

非行問題の取組みに関して対立していた校長派の教師とは結局接点が見出せないまま、彼等は第三代目校長と一緒に転動していくことになった。非行問題に取り組むことによつて、実践派⇨組合派の教師たちは自分たちの教育実践の方向に確信を持ち始め、相互の信

頼関係も強固になって行つた。組合を離れていたものも非行問題への取り組みに共感し、戻つて来るようになった。第五代校長は一中教師集団を次ぎのように評していた。「この教師たちにはおそるべき特徴がある。その一つは、校長といつしよに酒を飲もうとしないこと。その二つは、校長が陰のほうで他の教師を非難するようなこゝろふんをもらしても、けつして同調してこないこと。そしてその三つは、おどかしがきかないことだ。」<sup>(20)</sup>

ところで、この教育実践を通して自覚していった子どもの権利保障の視点は、非行問題に止まらず、学校全体を子ども視点から問い直すことになっていった。先ず着手したのはリベート、プレゼントの追放であつた。当時、学校が教材やワーク・ブックなどを購入すると、業者からリベートを受けとる慣行は、広く行われていた。また、プレゼントも、盆、暮れ、卒業式の時期、日頃の熱心な生活指導や補習のお礼にと、父母やPTAから金品を受け取る慣行も当然のごとく行われていたのであつた。こうした慣行は教師の退廃ととらえ、以後教育に必要な費用は、公費で負担することとし、全都にさきかけてリベート、プレゼントを追放していったのである。<sup>(21)</sup>

もう一つの改革は、補習教育の廃止であつた。先に指摘したように、越境入学が増加するにつれて、親・生徒から補習の要望が出されてきた。もちろん受験を念頭においての要求であるが、家では勉強しないから学校で教えてほしいという声もあつた。開始してみると、弊害も目だつてきた。補習は、放課後か始業前に設定された

が、始業前の時には就職組が廊下で待つことになり、彼等の内面に差別感を抱かせることにもなる。謝礼の徴収のこともあり教育上問題となつた。林によれば補習に関しては、父母層の保守系・革新系を問わず要求が強かつたと言う。勇気を持つて補習を廃止し、以後は、各教科毎にもう一度やつてほしいことと要求を、生徒に組織させ、教師の方で補足しておきたいことも合わせて、放課後もしくは夏休みに行くこととしたのであつた。<sup>(22)</sup>

## 2 新たな子どもたちの問題行動……子どもの問題行動の二類型 (Ⅱ・中間階層)

非行問題の取り組みは、五八年の二学期から始まつたわけだが、教師たちの奮闘により約半年でほぼ峠を越えていった。この間平行して学校改革を進んで行き、地域からもその教育実践が高く評価され、一中は一つの黄金時代を迎えることになった。六〇年一二月には、校長も代わり、管理職との摩擦も減少し、一中の学校づくりも前途洋々かに見えた。しかし、従来では考えられなかつた子どもの新たな問題行動が表面化して来た。

「ゲル」のような子どもと呼ばれたM男は、以下のような中学生である。学年は、千吉や政吉の二年下である。彼等との大きな違いは、家庭環境である。政吉や千吉、昇などは、極貧かそれに近い不遇な家庭環境であつた。ところがM男の場合は、中間階層で、両親も揃い、父は有名私大卒、母は高等女学校卒で教育程度は高い。ま



たある程度経済的にも恵まれていた。学校での成績も、政吉や千吉たちは、康夫を除いて、学力劣等に近く、作文や文章も満足に書けなかったし、書こうともしなかった。ところが、M男は成績上位で、作文も上手で内容も整っていた。

さて、実際のM男の行動はどうだったのだろうか。その特徴を摘記する。二年生になってからすぐに欠席し始め、出席したとしても大幅な遅刻。放課後や家庭では、飲酒、窃盗、暴力。すぐかつとなり、賑やかなときにはしゃいでプレーキがきかない。兄とけんかすると、「さすぞ」といつて、すぐナイフをちらつかせる……。政吉、千吉たちに輪を掛けて自分本位、わがままな行動をとった。彼等との決定的な相違は、教師たちが彼等を釣り上げ、抱え込んで説得して行く中で本音なり、核のようなものに触れることができた。

M男の場合は、いくら指導、説得、追求してもことごとく突き当たるものがなかったのだ。林は、「挿んだと思うと、指のあいだからぬるぬるとこぼれてしまうような感じである。」(1)二〇八頁、M男の詳細に関しては一六一—一六四頁参照)と評した。そしてM男に見られるような生活のリズムとスタイルの崩壊、それに由来する発達の未熟状態を「ゲルのような子ども」と命名した。

M男以外でも子どもの新たな問題が顕在化した。「おとなしき紳士たち」として紹介されている事例である。例えば、春子の場合はこうだった。彼女もM男と同学年。学業成績ではトップクラスであるが、試験一週間前になると眠れなくなるくせがついていた。母親

によれば、こうである。「負けまい、負けまいと思つて勉強するんです。ですが、とても神経質でして、試験前に一二時、一時まで勉強しまして、床にはいると眠れないんです。わたしだけどうして眠れないんでしょう、なんていいまして、夜中にしくしく泣いているんです。」(1)二五三頁)。さらに、勝男の場合はこうであった。彼も学業成績は抜群であるが、彼にとつては都立高校入学が最大の関心事で、学級の集団活動や学校生活のモラルなどは、二の次三の次なのである。これらの生徒は、いずれも中間階層の出身である。

### 3 親、おとなの権威失墜と新立身出世主義

ところで、重要な点は、ここで紹介したM男以下の生徒たちに見られる否定的現象は、非常に特殊な事例というのではなく、林によれば、「正常児と目される者にも潜在し、彼を包む状況のいかんによつては、いつでも問題児化し、非行児化する危険を内蔵している」のであった(1)二六三頁)。さらに、林・長浜によれば六〇年を境にして中学の教師が悩む問題児は、政吉や千吉のような極貧かそれに近い階層の子からM男のような中間階層の子へと移行しつつあった。

一中の教師たちは、こうした子どもたちの問題行動の背景として、親、おとなの権威失墜と新立身出世主義を指摘していた。例えば、M男の事例でいうと、親が子どもに対して確固たる家庭教育の方針を喪失していた。M男が学校へ行かないで寝ていると、母親が

「モーターバイクを買ってやれば、ほんとに行く？」(1)二一三頁)と聞くのだという。親が子育ての目標を喪失している原因として、良い学校(進学率の良い学校)へ入れておけば子どもは自然に育つという考えがあることを指摘していた。だから、少しでも進学率が良いとなると、学区域外からの越境が跡を絶たなかった。そしてその根源には、教育は立身出世するための投資だとする考えが台頭しつつあった。一中も一九五八年度は、全校生徒の約三〇%の三五三名が越境者であった(一九五八年度学校要覧)。

ところで、第一期生の卒業式において、校長が都立高校へ何名合格者を出したと誇らしげに話したことに對して、PTA会長が「そんなことしたいしたことではない」と批判的に発言していた。<sup>(25)</sup>当時の千住界限では上級学校への進学を抑制する子育ての慣行がまだ健在であったのだが、社会の変化の中で次第に色褪せて行くのであった。それに代わって高校受験の圧力が生徒・父母に重くのしかかっていた。一中の生徒会誌、PTA会誌にその影響を見てみよう。

ある父母は、「一中は義務教育の精神を比較的良く守っている」と評価しながらも、「高校は大学の予備校、中学は高校の予備校、小學校は私立中学の予備校の観を呈している。」<sup>(26)</sup>と当時の受験の過熱状態に苦言を呈していた。また父母と教師との座談会で、父母たちは高校受験のことが一番心配だとしたうえで、ある父母は「三年で受験勉強をひかえていますので黙々とやっております。家では勉強をはじめると、ラジオを消して家中で気を配っております。」と悩み

を述べていた。<sup>(26)</sup>他方、生徒の方も「二年になって高校受験の事等を先生達から聞かされると今までの勉強が友達をとつても仲のよい友達をけ落す練習のように思えた……。でも学校へ来るという事が中には『もつと大切な何か』がある様にも思える。」<sup>(26)</sup>と、受験競争が学校を支配しつつある様子にとまどいをみせていた。

おわりに

六〇年前後は、日本社会が大きく変貌していく時期であるが、子どももまた、地域社会、家族、受験競争の中で新たな発達の矛盾に直面していった。こうした矛盾を打開するために、一中の教師たちは、これ以後集団主義教育を、まずは学級で、そして学校ぐるみの実践として展開していくことになる。

付記

本稿執筆に当たっては、林友三郎氏、長浜繁雄氏から格別のご配慮を頂いた。また、足立一中関係の資料閲覧については、同中学の齋藤常男教頭に便宜を図って頂いた。ここに記して感謝いたします。

注

(1) 本書は一九六二年に初版が刊行され、七九年に増補されて再刊され、九〇年に「現代教育一〇一選」の一つとして三たび刊行された。

版元は、いずれも国土社である。なお、本稿での引用は一九九〇年版

からである。繁雑さを避けるために、本書からの引用は、本文中に(1)と該当頁を書くことにした。

(2) 久富善之「戦後史の中の教師文化」、稲垣忠彦 久富善之編『日本の教師文化』、一九九四年、東京大学出版会。田沼朗「ディシプリン問題と教員文化——前後の非行・紛争・荒れの中から——」、久富善之編著『日本の教員文化——その社会学的研究——』一九九四年、多賀出版

(3) 一九九七年三月二四日林氏、四月一九日林・長浜の両氏、六月二日林氏から聞き取りを行った。

(4) 林氏からの聞き取り。一九九七年三月二四日。

(5) (4)に同じ。

(6) (4)に同じ。

(7) 福田正雄「徽章」、足立一中生徒会誌『むらさき草』第七号、二頁、一九六二年。

(8) 足立第一中学校『創立四十周年記念誌 葦立ち』の中の座談会「一中の未来を語る」における関雄三氏の発言、二七頁、一九八七年。

(9) 林・長浜氏からの聞き取り。四月一九日。

(10) 宗像誠也・国分一太郎編『日本の教育』、九二頁、岩波新書、一九六二年。

(11) 長浜氏からの聞き取り。四月一九日。

(12) 林友三郎「困難なたたかひの継統の中で」、『生活指導』一九六九

年一月、三五頁 明治図書。

(13) (4)に同じ。

(14) (4)に同じ。

(15) 遠藤豊吉「われらの中の教師像 林友三郎」、『小二教育技術』一九六四年三月号、八二―八三頁参照、小学館。これは実践紹介的なルポターージュである。

(16) (11)に同じ。

(17) (11)に同じ。

(18) (12)の三四頁、および林・長浜氏からの聞き取り、四月一九日。

(19) (12)の三六頁。

(20) (15)の八八頁。

(21) リベート、プレゼントの廃止に関しては、(1)の一六一―一六四頁参照。なお、教師のアルバイト禁止に関しては、林氏によれば当時の賃金の低さもあって、職場での合意が得られなかったという。六月二日の聞き取り。

(22) 補習追放の取組みに関しては(1)の一六三―一六五頁参照。

(23) 林氏からの聞き取り、六月二日。

(24) 渡辺孝次郎「ひとこと」、PTA会誌『ひびき』第一号、四頁、一九六〇年。

(25) 『ひびき』第九号、一九頁、一九五七年。今井さんの発言。

(26) 島崎知義「もっと大切な何か」、『むらさき草』第六号、一〇―一頁、一九六一年。